

ばってん

事務長会報第13号

平成15年4月1日

長崎県公立学校事務長会

長崎南高等学校内
〒850-0834 長崎市上小島4-13-1
電話 095-824-3134



柔軟かつ大胆に

～泣こよかひっ跳べ～

事務局長 阿比留 徳 生 (長崎東高等学校)



「泣こよかひっ跳べ」というのは、悩みあぐねて何もせずに後悔するよりも、失敗を恐れずとにかく前に向かって走り出せという意味合いの薩摩言葉だそうです。悪い結果のみを想定し、議論することは詮無いことであります。それよりも、まず実行に移す決断をせよということなのでしょう。

平成13年10月初めての高等学校勤務となり、1年も経ずして事務長会の事務局を担当することになりました。折しも「長崎県高等学校教育改革第1次実施計画」が公表され、総合選抜の廃止や併設型中高一貫教育校の開設など大きな変革が始まる時でした。高等学校教育改革に対応できる学校事務体制をどうするか、泥縄ではありますが腐心しています。具体的には、事務室に係わる学校徴収金や制定物品、購買部や進路指導部などの組織や会計、事務分掌などです。学校(事務室)の説明責任を果たすという視点からも考えなければなりません。

生徒から選ばれる学校、翻って、生徒を選ぶことができる学校を創りあげるためには、学校自らが目標を設定し、具現化していかなければなりません。このような学校の変化に即応できる事務室の体制でありたいと常々思っています。

ところで長崎東高等学校には校訓がありません。そのかわり第2代「梅田倫平」校長の「梅はうめ、桜はさくら、各々いいところがある。その天分を生かすことが人間としての意義であり、価値であり、生命である。」という言葉が語り継がれています。これからは否応なしに横並びではなくなります。私の口癖は、「東はひがし、西はにし」です。他と違うことに対する漠然とした不安を払拭するための囃子ことばみたいなものです。枳擲棒を振られながらも、改革の本旨に沿うべく呻吟しています。

今までに多くの職場を経験してきましたが、どこでも失敗を重ね、そのたびに猛省しつつも馬齢を加えてきました。どの職場にも懸案といわれるものがあると思います。そして不思議なことに、問題解決にネガティブな定理のようなものを支持する抵抗勢力が必ず存在します。新しい職場では、慣例や人的なしがらみに拘泥することなく、柔軟な発想で仕事をしたいと思うのですけれども。

懸案処理に大切なことは、問題の本質に正面から対峙する当事者としての意識ではないでしょうか。そして、実行するということが以上に重要なことは、その過程や結果を検証することだと考えています。次回は、必ず改良バージョンで臨む。また、結果が悪ければ、臆面もなく改めたり中止する機動力も兼ね備えたいものです。私の理想とする事務長像は、無知を逆手にとる年齢の初任者ということになるのでしょうか。

ある会議の場で、「伝統の継承」というキャッチコピーが出てまいりました。そもそも伝統とは、継承されたためしがない。現代に遺っている伝統は、時代に応じて、現代風にアレンジされ、コーディネートされ、新しい生命を次々に吹き込まれてきたからこそ、いま伝統として在るのだと思います。実践の積み重ねが伝統となるのであって、決して継承するという類のものではないと思うのです。大いに不満ではありますが、立派な言葉に注文を付けるほど野暮でもありません。

学校(事務室)という組織は、結果的に豊富な知識や経験が桎梏となって、自らが変化することに躊躇しているようにも思えます。しかし、時代が私たちに変わることを突きつけています。好き嫌いかかわらず「せんばいかんことはせんばいかん。」のです。自戒しているつもりですが、どうも最近、論理性よりも感情が先に立つ傾向にあります。

先例のない改革の時代、先が見えない時代だと声高に叫ばれていますが、何時の時代に先が見えて、変革がない安直な時代があったのでしょうか。懸案は取り除かれねばならないのですが、簡単に処理されるようでは、懸案の沽券にかかわります。我が家の家計に反比例して、ストレスの預金残高は順調に増加するばかりです。当事者であるという意識をもって気長に取り組めば、解決の糸口も見出せるのではないかと、かすかな望みを抱きつつ、やがてひっ跳ぶ春を待っています。

古々米のような新米事務長が事務局を担当して、皆様には大変ご迷惑をおかけしたと思います。御協力に感謝しつつ、悪文の筆を擱きます。

1年経って思っていること

西陵高等学校 前田 豊

私にとって就職以来一番短く感じた1年間も残すところ1月弱となりました。

教育庁に勤務していた頃、時々思い描いていた自分なりの事務室のスタイルがあり、学校に勤めはじめてそこまで到達するのに半年位かかってしまったが、今後でもできることから改善が図れればと思っているところです。

1年前までは、仕事柄事務職員とは深く関わっておりましたが、生徒と先生を中心とした学校の日々の営みに関しては比較的クールに見ていたと思います。その私が、4月以降、職員朝会デビューを初め色々な経験をし、今までにない感激を味わってウルウルとなったこともありました。(ちなみに、卒業式で礼服を着るとは知りませんでした。)

特に、先生に対する印象が変わりました。土曜講座に、学習合宿に、またクラブ活動にと休みを返上して、黙々と頑張っている先生方を見ていると本当に頭が下がる思いがし、本県教育はこの人達の頑張りに支えられているなとつくづく感じます。

学校は私の好きなおでんに例えれば、生徒が“具”，教職員が“つゆ”みたいなものかと思いますが(私が勝手に思っているだけです)，“つゆ”の主役である先生方にいい味をだしてもらいたい。そのためには、我々も知恵を絞る(ついでに贅肉も)ながら、様々な学校活動に積極的に参画する事務室でありたいと願い、事務室一同、常日頃「がんばります」の大安売りをやっています。

目的はひとつ。生徒と先生にたくさんの感動を味わってもらいたい。そして我々事務室にも感動のおすそ分けを。

意見 異見 違見

施設が変われば学校が変わり 学校が変われば、生徒も変わる

佐世保南高等学校 主任 富永康 幸

年度末のこの時期、決まって忙しくなります。工事に予算が付き、いくつもの工事が絡み学校中がせわしくなります。それはそれで楽しいのですが、やはり悔いが残ってしまいます。施設が完成していくにつれ当初のイメージとのずれが生じますが、諸般の事情から妥協せざるを得ない状況に追い込まれてしまうのです。

何故こんなことになってしまうのか？ その理由の一つは企画立案の段階から平面と立面のみで考えていたこと、二つ目は従来の学校施設の考え方に囚われてたということです。どこを切っても同じヨウカン型の校舎に慣れすぎて、学校は個性のある人が住まうものだということをないがしろにはしていなかったかという反省が心をよぎります。

施設改修に必要なことは、CAD的なイメージで完成予想図を頭の中に思い浮かべること、従来学校という建物が画一性と機能性・耐久性にその重点を置いてきたという現実からそろそろ脱却すべき時期にきていることを認識することです。

学校は生徒にとって学習の場であり、社会性を身につける場であり、自らを鍛練する場ですが、同時に家庭生活の延長であり生活空間としての場でもあります。「住まう」という視点で学校内の施設を見てみると、“うるおい”とか“やすらぎ”という言葉からは程遠いように思えてきます。

例えばトイレの手洗い場の高さは男女で違ってもいいはずですし、便器も今の家庭では洋式が多くなってはいないでしょうか。保健室のベッドの高さにしても診察する側の高さであり、される側のそれではありません。図書室の畳のスペースも「管理が出来ない」という理由で使用制限をしたり、出入口を片側だけにするのも、どこか違うような気がします。

施設の管理が自分本位になってはいないか、主体は誰なのか…を考えながら、学校が生徒が変わっていく教育環境の整備に努めていきたいものです。

私も後悔しないように空想力(あるいは妄想力?)をもっと身につけなくては…と思います。

提 案 します

— つくろう “趣味のサークル” —

社会環境が大きく変化している中、学校事務は、ますます複雑・多様化してきております。

そのような中、学校事務全般を掌理する我々事務長の責任は大きいものがあり、会員誰もが、差こそあれストレスを抱えているのではないのでしょうか。

私事ですが、私は、時々山登りをします。これは、私の最大のストレス解消法です。仲間と一緒にいるのが多いのですが、仲間が多いほど、楽しく、愉快で、疲れも軽いようです。

本会の会員には、囲碁、将棋、盆栽、登山、コーラス、俳句、その他いろんな趣味を持っている方が沢山いるの



(吉岐商 高澤 祐)

ではないでしょうか。

そこで、同じ趣味を持つ会員同士がサークルをつくり、余暇を楽しみ、併せて情報交換を行い、更にはリタイア後の生きがいにまで繋がればいいな、と思うところです。

最初は小グループでも、先々、地区、全県へとサークルの輪(和)が広がればもっといいな、とも思うところです。

会員の皆様、「趣味のサークル」をつくり、活発に活動して、日頃のストレスを吹っ飛ばしましょう。

今回は、私の思いを披露するに留め、平成15年度に入ってから、時期をみて事務局へ相談し、アンケート調査を実施するなど、サークルづくりに向け前進させていけたらと思っています。

会員の皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いします。

(九重山人)

会 員 漫 筆

「男声合唱」とともに

野崎養護学校 井手輝実

“趣味は？”と聞かれると、音楽とは答えるが「合唱」とは決して言わない、なぜかというマイナーであり気恥ずかしい思いが心の片隅にあるからである。あえてこの紙面で公にするのにどれほどの勇気がいるものか・・・。

さて私の合唱との出会いは、高校の吹奏楽部に所属する傍ら合唱部の男声パートが少ないということでお手伝い？に顔を出したのが、そもそもの始まりです。またその頃、フォークグループ「赤い鳥」のデビュー曲「竹田の子守歌」が美しいハーモニーでヒットし、その素晴らしさに感銘を受け、“我が人生に悔いはなし”とばかりに、合唱にのめり込むこととなりました。

ところで全国的な合唱離れ傾向の中で、最近の「アカペラブーム」は、合唱仲間では大歓迎であり、また男声合唱が得意とする領域で、伴奏楽器が要らず、いつでもどこでもという手軽さが特徴です。どこかの銀行グループが流行っていますが、我々事務長仲間でも・・・？と密かに思ったりしています、いかがでしょうか？

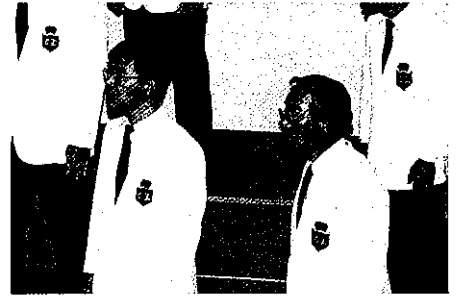
さて10数年前から男声合唱団「オールドダックス」に所属し、演歌・フォーク・民謡・クラシックと幅広いジャンルで活動を続けていますが、年齢や職業の枠にとらわれず、また男ばかりで気を遣うこともなく、ハーモニー

の中に身を委ねる心地よさや、歌いながらの飲み会は職場では考えられない最高の雰囲気です。これはストレス解消ばかりでなく、どんな高価な栄養ドリンクでも得ることのできない元気活力の素に他なりません。それに多種多方面にわたる職業の方々との付き合いは、自分自身の価値観や生活感、社会性を見つめ直す絶好の機会であり、貴重な体験であると思っています。また他団体との交流やオーケストラとの共演などで、高いレベルの演奏会に直に接することができ、この上ない幸せと満足感を味わっています。

去る9月には、野外オペラ「ラ・ボエーム」に出演する機会を得、原語での歌詞や演技をしながらの合唱へ挑戦しました。久しぶりのオペラは緊張感と暗譜への集中力を要し、ボケ防止の貴重な薬となったことは言うまでもありません。

最近、組織に束縛されることや他人との関わりを敬遠する若者が増える傾向があるようですが、合唱人口の減少をくい止めるべく、皆さんの学校の合唱部の存続や活動を精一杯、後押ししていただければと思います。

さてさて、今週も水曜日：混声合唱、木曜日：男声合唱、そして土曜日は4月に立ち上げたばかりの児童合唱団へと出かけていきます。



先輩から

なつかしい先輩から俳句をお寄せいただきました。昭和五十一年三月に長崎北高等学校事務長を退任された尾崎敏雄様です。八十八歳になられる今も、俳句を楽しみつつ悠々とお過ごし御様子です。ありがとうございます。いました。(に)

港内の汽笛

くぐもる黄沙かな

春一番

女神の嫉妬かもしれず

たんぽぽの

絮のどぶどぶ過疎の村

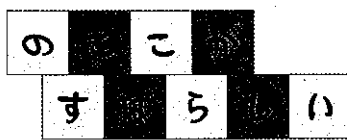
春燈に元花町の名残かな

木瓜咲いて

姉といもとの瓜二つ

尾崎 敏雄

ウチ



わが校自慢

佐世保中央高等学校 脇坂正孝

本校は、佐世保市役所の北方約1kmに位置し、東に烏帽子岳、西に将冠岳を望み、玄関前を佐世保川のせせらぎが流れる自然環境に恵まれた学校です。

更に、国道と松浦鉄道が並行して走り交通至便で生徒の通学条件としても最高の場所にあります。

平成12年度に総合落成式を終えた校舎・体育館・グラウンド等の施設・設備は明るく近代的でバリアフリーを基調とした開放感にあふれています。

また、校地の一部を地域に開放し、通学路や生活道路として、地域の方々が利用されています。

校舎は吹抜けの中庭、エレベーター、大講義室、給食室、重層階建体育館等、最新の施設・設備が機能的に配置され、来校の方々から「すばらしい学校だ」と感嘆の声をいただいています。

「すばらしい」ことは、ハード面ばかりでなく、ソフト面にも数多くあります。

第一に、本県初の単位制高校であり、定時制課程昼間部、同夜間部、通信制の3課程が併設されています。第二に、本校以外で修得した単位の認定、定通併修制、前期・後期の2学期制の導入等により、ゆとりある学校生活を送れるような条件整備を行っています。第三に傾斜配分の導入による新しい入試制度(昼間部)や、登校時の服装を自由にするなど個性を伸ばし、自主性を大切に教育に努めています。第四に生涯学習講座にも力を入れ、多くの講座を開講しています。(15年度は9講座を予定)。

このように、本校は時代の要請を先取りし、「地域に開かれ、地域とともにあゆむ」をモットーに、職員・生徒が一丸となって特色ある校風作りに努めています。

随 想



目を見張る高校生パワー

— 2003年長崎ゆめ総体への道 —

県教育庁全国高総体推進室長 中村 憲昭

『ばってん』の題字の横にも、2003年長崎ゆめ総体のシンボルマーク。ありがとうございます。

全国から選手・監督等約6万人、応援者約5万人を迎えるビッグイベント。開催県にとっては半世紀に一度の機会に、幸か不幸か遭遇しました。

ならば、長崎のいや全国の高校生のため、また、ハウステンボスの話題の中、長崎県活性化の一翼も担えればと力んだりしています。

お陰様で、多くの方々の御支援をいただいています。互助だよりの表紙は全面ゆめ総体。役所や学校の出版物にも、ゆめ総体関連の記事やシンボルマーク。新聞、テレビ、ラジオも積極的に取り上げてくれます。感謝、感謝・・・です。

ところで、この仕事を通じ強く感じることは、本県高校（高等部）生の素晴らしさ！です。

会場を飾る草花の栽培やプランター製作、中華門やグラバー邸の意匠による案内所の準備、郷土色豊かな記念品づくりなどに創意工夫を重ねている生徒たち。公開演技、音楽、アナウンスの練習などに汗を流している生徒たち。

そして、ゆめの舞台への出場を目指し、日々練習に励んでいる生徒たち。実に多くの活動が展開され、それぞれの生徒が輝いています。

2003年長崎ゆめ総体への道程は、高校生の自己表

現の場となり、運動部、文化部、生徒会、郷土学習、生徒指導等々、教育活動の様々な分野にわたる体験的・総合的な学習の場となっており、その成果も如実に現れていると感じています。

15年度になり、競技補助員等の役割も決まれば、生徒たちの参加もいよいよ本格化。ゆめ総体への高まりが一段と大きくなるものと期待しています。

高校生の活動ぶりは、ひたむきでハイクオリティ。推進大会や残日灯点灯式でも、高校生はスゴイ、ヤルナという印象を十分に見せつけました。

全国高校総体の入場行進においても、本県選手団の立派さは際立っており、県高総体開会式の素晴らしさも御存知のとおりです。

他県の様子も見て感じることは、長崎県の高校生は清潔感にあふれ、高校生らしいということです。

日ごろの、教職員の方々の熱心な教育実践に、敬意を表さずにはおれません。

2003年長崎ゆめ総体は、高校生のスポーツの祭典であると同時に、長崎県の魅力を全国に紹介するチャンスであり、また、本県高校教育の水準を示す（見方を変えれば評価される）場でもあります。

本番まであとわずか、教育県長崎の底力を目に物見せる時が近づきました。高校生のために会場地実行委員会も頑張っています。各学校での取組よろしくお願いします。

また、全国からの来県者に、「ようこそ長崎へ」、「頑張って」の声かけや、きれいな町（清掃等）でお迎えするなど、身近にできる「もてなし」をよろしくお願いします!!

長崎が
熱く動く

編集後記



つい先ごろのことです。夜来の雨がやっと治まりはじめた朝方、浦上川に架かる橋を渡っていた私は、川面に浮かぶあでやかな彩りに気づきました。そこには、おびただしい桜の花びらが左岸に沿って止めどなく漂い流れているのです。雨があちこちの支流から運んできた花びらを、今度は下げ潮が河口まで運んでいるのでしょうか。幅は一尺ほどもあろうか、あたかも薄紅色の長い長い帯が一条、ゆらゆらと揺れているかのようでした。桜という花は人々の目から去ろうとする間際でさえも、かくも見事に春を演ずるものなのか。生まれて初めての眺めでした。来年の桜のころ、雨上がりの朝に再びこの橋の上立ちたいものです。

「ばってん13号」をお届けします。原稿をお引き受けくださった皆さん、ありがとうございました。年明けの忙しいときに原稿書きを頼むのはいささか気が引けたのですが、そんな遠慮もものは、そろって御快諾をいただきました。

さて、今年はいよいよ「ゆめ総体」、もう目前です。推進室の中村憲昭室長さんに心境を綴っていただきました。一読、渾身の力を込めて引きしぼった強弓から今しも矢を放たんとする、まさに満を持した熱意を窺い知ることができます。われわれ事務長も「ゆめ総体」の当事者の一人であるということ、強く思い起こさせるものとなりました。

事務長会の皆さん、「ばってん」への意見、注文、助言などをお寄せください。投稿もちろん大歓迎です。原稿料については今後、後ろ向きの姿勢で消極的に検討したいと思います。（に）